

86. マトウダイ 馬頭鯛(くるまだい)

秋



◇撮影後のコメント◇

上品な白身であることに相違ない。懐が広いし、それを前面に出さない奥ゆかしさが益々その上品さ、懐の広さの印象を助長させる好循環である。酢飯との協調性もすこぶる好いので、独善的ではないし、孤高でもない。白身界のセンターに立つべき逸材だが、周囲にその座を譲る。自己顕示欲の微塵も感じられない。見習うべきである。

感覚の話の続き。再掲する。色覚異常の話ではなく、人が感覚として認知しているものが、他人と全く同じ感覚として認知しているかは、見えないし、誰にも分らないし、証明できない。という話である。極端な例として、Aさんが赤として認知され、赤と認識されているものが、Bさんは緑として認知され、赤と認識されていたとする。言葉の意味と補色関係にある認知が存在する可能性があり得るということである。AさんとBさんの認知が180度ずれていても、この例では、認識の点では一致している。Bさんが幼少の頃前項の例で、花の色と同色と認知し選択した絵具に「あか」と書いてあれば、Bさんが緑と認知していても赤と認識させられる。認知の違いは親も先生も本人さえも気付かない。

マトウダイの話。これを狙っているのではないが、底付近を探っていたら、釣れた。ポツポツ釣れるし、釣れたのをよく見かける。味は一言上品。鯖ネタに持って来いである。